

死に急ぐ鯨たち

ぼくの仕事場は噴火で出来た湖をとりまく外輪山にある。近い将来に大地震を予告している筆頭候補地の駿河湾から六十キロほどの距離だ。専門家の意見によれば、明日にも地震が起きて不思議はない状況らしい。兆候がありしだい警報が発令されることになっている。當時、危険な次の瞬間と鼻を突き合わせているわけだ。もつとも集団移住の動きについてはまだ耳にしたことがない。

二つの時間が平行して流れているようだ。一つはプレートの圧力で限界まで蓄積されたエネルギーが解放を待つ、物理的な時間。いま一つは昨日のように今日があつたのだから、今日のように明日があるはずだという、日常的な経験則の時間。物理的な時間が避けがたいことを知りながら、なぜか経験則を優先させてしまっている。

ためにここでちょっとした賭をしてみよう。この一行を書き終えるまでの間に地震がくれば、一万円支払います。

無事に地震をやりすごせた。ぼくは賭に勝った。あいにく賭の相手を特定しなかつたので儲けはしなかつたが、損もしなかつた。ぼくだけでなく、実際に地震がくるその直前まで誰もがこんなふうに楽観的見通しの方に賭けつづけるにきまっている。

八世紀の中国の詩人杜甫の作品に、「国破れて山河あり」という句がある。国は政治であり、山河は日常だろう。国が破れれば当然山河は荒廃するが、消滅するわけではない。国が破れてもなお生きつづける民衆の拠り所として、荒廃してもなお存続しつづける山河の概念を提示したのだろう。人間の歴史はけつきよくのところ、さまざま不安定要素に対して日常を拡大しつづける努力だったのだ。

しかし現代の、とりわけ第二次世界大戦後の危機には、これまでの危機とは質的に異なるものが感じられる。安全のために、不信のシンボルである武装が正当化される。冷戦を通じて肥大化し続けた軍事力が核兵器であつたために、やがて力の均衡という奇妙な平和にたどりつく。むろん均衡で競争が中断されたわけではない。不信の天秤の両端に、同じ速度で荷重がかかっていく軍拡の均衡なのだ。誤解や錯覚や手違いによる攻撃開始が絶対にありえないとしても、どちらかが先手必勝の機会を掴んだ瞬間、均衡は破れざるを得ないのだ。平和のために、犠牲を最小限にとどめるために、最終兵器の発射ボタンに指がかかる。その機会を相手に譲らないですむように、先手必勝

の秘密を目指して先陣争いを続けるしかない。

全面核戦争になれば、もう山河も残らない。山河も一緒に破れてしまうのだ。

国家の中に巢食つている不信の構造に光を当ててみたい。良い国家や悪い国家ではなく、国家の存在自体を疑つてみるべき事態がきたようだ。国家だけにはなぜ暴力が許されるのか、尋ねてみるべき時がきたようである。国家の主権を越えた司法権の創置は絶対に不可能なのだろうか。現状ではとても見込みなどありそうにない。司法権が有効に力を發揮できるためには、犯人の武装解除が出来るだけの暴力の裏付けがなければ駄目だろう。もともと自分を超えるものを許容できないのが国家の体質である。人間の政治能力の限界に行き着いてしまったのだろうか。

鯨の集団自殺は謎めいている。かなり高い知能をもつてゐるはずの鯨の群れが、とつぜん狂つたように岸をめがけて泳ぎだし、浅瀬に乗り上げ、座礁してしまうのだ。いくら追い返しても逆らうばかりで、そのまま空氣に溺れて死んでしまう。何かにおびえて逃げようとしているのだろうか。鯨を怖がらせるものと言えば、海の猛獸といわれるシャチか鮫だろう。しかし鮫のいない海域でも見られる現象だし、シャチ自身が鯨の仲間で、やはり集団自殺をくわだてるのだ。そこで、もしかすると溺死の恐怖におびえた鯨が海から逃れようとしているのかもしれない、と言う説さえあらわれた。海の生物が溺死を恐れるというは逆説的で、考え方としてはたしかに面白い。鯨は魚ではなく、もともと肺で呼吸する地上の動物だったのだから、ことと次第によつては先祖返りして水による窒息死の恐怖心を抱きはじめないとも限らないわけだ。寄生虫か細菌に脳をおかされ、浮上する力が失われたとき、可能性としての溺死におびえるあまり、現実の死を見失うこともあるだろう。

人間たつて鯨のような死に方をしないという保証はどこにもない。（一七五三字、引用にあたつて一部表現を改めた）

安部公房『死に急ぐ鯨たち』（新潮社、昭和六十一年）より